パッチワークモデルの一例としての低空飛行な働き方

働く母として転職等の決断時に大切にしてきた考え方や、私にとっての弁クの活動、低空飛行な働き方についてお伝えします。

弁理士　芝田美香

ロールモデルよりもパッチワークモデル

弁理士における女性の割合は約 16%（2022 年 4 月 30 日現在）であり、年々増えていると実感するものの未だマイノリティである。このコラムで、将来弁理士を目指したい女性やキャリアに悩む女性弁理士にお伝えしたいことの一つは、ロールモデルでなく「パッチワークモデル」がおすすめであること。女性弁理士として目指したい唯一の人を探すのは至難の業でも、様々な先輩方による多様なご経験のうち、ご自身にとって真似したいところ、出来そうなところだけ良いとこ取りするのは、今からできるし意義も大きい。ぜひ今回を含む女性弁理士の先生方によるコラムも、パッチワークモデルの一例としてご活用いただきたい。

自分にとって腹落ちする決断

私自身についてお伝えすると、高校生の時から目指していた夢の弁理士試験に合格（2007 年）し、特許事務所→メーカー企業→特許事務所と立場を変えつつ知財の仕事を続けている。2008 年からは面白くも忍耐を要する 2 人の男の子の子育ても並行しているので、日々の働き方、転職活動、昇進・昇格というキャリアの様々なシーンで、働く母というハンデをしっかり感じつつも、そういう時こそ「自分にとって何が大切か」という自問自答を繰り返している。これは男女問わないことだが、キャリアを考える上で、例えば転職するかしないかでも、必ずメリットとデメリットは混在するので、後悔しないためには「自分にとって腹落ちする方」をご自身で選ぶことが大事だと思っている。特に働く母の場合、ご自身の年齢と子育ての大変な時期がタイミングよく合うことは稀なので、「実際に働くのはご自身」であることを胸に決断できると良いかもしれない。

私自身の体験でいえば、３５歳のときに特許事務所からメーカー企業に転職している（長

男は小学校１年生、次男は年少のときである)。まだ保育園の送り迎えを要し子育てにも手間のかかる時期だったが、一度は発明の生まれる場所である企業知財で仕事をしたいという意思を貫いた転職であった。振り返ってみると、転職活動も転職後も苦労が多かったのだが、自分軸で決断できたことにより後悔は無く、現職にも活きる貴重な知識や体験を得ることができた。

弁クの活動を通じて

弁理士クラブの活動では、本年度は企画委員として Twitter や YouTube の立ち上げに関わっている他、以前は研修委員として「研修の弁ク」ならではの魅力的な研修もいくつか企画し担当できた。「仕事や家庭を維持しつつ、弁ク等の業務外活動をする」のは何故か、どうやって時間をつくっているか、と聞かれることがあるので、ここで触れたい。私にとって弁クの活動は、研修委員への参加を機に、気がついたら芋づる式に色々やっていたというのが本音であるが、振り返ってみると、本業のみでは得られなかった知識の吸収や人脈づくり、新たな企画へのチャレンジができる場であるという魅力を感じていた。弁ク YouTube のインタビューで弁クの活動を「部活動」とおっしゃった權正先生のご意見にも大きく賛同している。

弁クの活動を続ける中で、以前のリアルの研修や委員会活動では、平日夜間等に活動するには家族との予定調整が必須で、時間の確保が大変な時もあったが、上記魅力があってこそ続けられていたのだと思う。一方、現在は、委員会活動や研修、判例研究部会等のオンラインの活動が主流になっており、弁クの活動も断然に私たち働く母が参加しやすくなっていて有難い。今年は特に、弁ク YouTube で配信する動画の企画や編集という、新たな分野にもチャレンジの機会をいただいており、様々な方へのインタビュー等を通じて、改めて弁クの様々な表情を感じたり聞いたりできるのが非常に面白く、ぜひ皆様にも動画を通じて感じていただきたいと考えている。

低空飛行で飛び続ける働き方

最後に私の働き方についてお伝えしたい。私自身は、大半の母親が専業主婦であった時代に生まれ育ったのであるが、何の因果かバリバリに深夜まで働く女性を母として育ってきた。そんな母を見て育った私自身は、違う生き方に憧れを感じたのか、弁理士としては珍しいと思うが仕事をセーブし家庭とのバランスを重視した働き方を続けている。この私の働き方は「低空飛行」と言わざるを得ない。こんなんなら仕事を辞めてしまおうと思ったことも、一度や二度では終わらない。しかしながら、「低空飛行でもいいから飛び続けなさい (山口理栄さん)」という言葉は、苦しいながらも働き続けてきた、私にとってのお守りの言葉である。年数を重ね、様々な苦難も越えてきた今だからこそ、振り返ってみると、低空飛行でも働き続けてきたことにより、得られたものが確かにあったと思えている。

ふと気がつけば、子供たちも小中学生になり、手がかかっていた時代からお金のかかる時

代へと突入しようとしている。人生１００年時代なので、これから先は低空飛行ではない新しい働き方を選ぶこともあるのかもしれない。多様性ある社会に向けて、私のような低空飛行の働き方を選ぶ弁理士もいることを、皆さんにお伝えしたいと思い、本コラム執筆に参加した。いつかどこかで誰かのパッチワークモデルの一端になれば幸いである。